

タイトル	献辞
著者	森下, 宏美; MORISHITA, Hiromi
引用	北海学園大学学園論集(178): xxvii-xxviii
発行日	2019-03-25

献辞

経済学研究科長 森 下 宏 美

2019年3月末日をもって、経済学部の野崎久和教授がご退職されます。先生のご退職記念号を発刊するに当たり、これまでに賜った御指導と御厚誼に対する感謝の気持ちを込め、経済学研究科長として一言ご挨拶申し上げます。

野崎先生は、2003年4月に経済学部助教授としてご着任され、2005年4月に教授となられ、今日に至るまで多方面において本学の発展にご貢献されました。先生は、一般教育においては「国際事情」を、学部教育においては「国際事情」と「国際事情特論」、「ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」、「外書講読（英語）Ⅰ・Ⅱ」、「基礎ゼミナール」、「インターンシップ」を、また、大学院教育においては「国際関係論特殊講義および同演習1・2」（修士課程）、「国際関係論特殊研究および同演習1・2・3」（博士課程）をご担当され、多くの学生・院生の教育にご尽力されました。学生・院生に対して先生は、知らず知らずのうちに自らを閉じ込めている限界や殻を打ち破り、広い世界に自分自身を開いていくことの大切さを説かれていらっしゃいました。そのような先生からのアドヴァイスや激励は、多くの学生・院生にとって、自らの進路を切り開くうえでの大きな支えとなったに違いありません。

世界に向き合うそのような姿勢は、先生ご自身が実践されてきたものであるとも言えましょう。先生は、京都大学で政治学を修められた後、丸紅株式会社に入社され、程なく、イギリスのワーリック大学大学院およびケンブリッジ大学大学院の両大学院において、国際政治経済学の修士課程を修了されました。その後帰国され、丸紅の調査部、国際業務部、プロジェクト金融部などでご活躍されました。そして、ワシントン出張所に勤務されていた折に、湾岸戦争に突入していくアメリカの政治過程をつぶさに観察され、その時のご経験をもとに、国際政治経済の研究者としての問題意識を培われてきました。湾岸戦争は、2001年の9.11とその後のイラク戦争の淵源となるわけですが、アメリカによるイラク攻撃が開始されたのは、先生が本学に赴任される前月の2003年3月のことでした。先生は直ちにこの戦争に関するご研究を開始され、計5本の論文を相次いで発表されるとともに、2006年には早くも『ブッシュのイラク戦争とは何だったのか—大義も正当性もない戦争の背景とコスト・ベネフィット』（梓出版社）を上梓されました。当時経済学部には、「耳学問の会」という有志による勉強会があり、このご著書をめぐって先生のお話をお聞きする機会がございましたが、その中で先生が、アメリカ軍の誤爆・誤射によるイラク市民の犠

犠牲者の多さを訴えられていたことを記憶しております。武力によらない紛争解決とそのため外交努力がいかに重要か、大義も正当性もない戦争になぜ突き進んでいくのか、その時民主主義はどのように機能するのか、先生が提起されたこれらの問題は、今の私たちにも重く問われております。そして、時々刻々と変化する現在進行形の現実の中に進むべき道を探ろうとする粘り強い努力、公開の議論の中でそれを追及されようとする率直で開かれた姿勢に、学ぶべき多くのものを感じております。

また先生には、他に、『国際経済システム読本—国際通貨・貿易の現在を考える』（梓出版社、2008年）、『通貨・貿易の問題を考える—現代国際経済体制入門』（日本経済評論社、2014年）のご著書がありますが、国際貿易、国際金融にかかわる豊富な実務経験に裏打ちされた具体的で明快な解説は、学生にとってのみならず、現代の国際経済を理解するための格好のテキストとして大いに役立ってくれます。ここにも、生きた現実をとらえようとする先生のご姿勢を見ることができます。今の私たちの社会は、かつてない大きな変化の時代に入りつつあります。そのような時代にあって、大学には、よりよい人間社会を築いていくための教育と研究の一層の促進が求められることとなりますが、これまでお示しくくださった教育と研究に対する先生のご姿勢を胸に、本学のさらなる発展のために努力してまいりたいと存じます。今後は北海学園大学名誉教授として、ご指導、ご鞭撻、よろしくお願い申し上げます。最後に、野崎先生のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます、献辞といたします。